一人ひとりの暮らしを守り、ぬくもりと潤いのあるまちに。

心の通うまちづくり

私たちのまち・東区を元気にしたいという思いで、20年間走り続けてきました。

まちが元気であるための条件は、ハード・ソフト両面が充実していることです。

施設や道路などはハードであり、それを利用する人や、利用するためのサービスはソフトです。ハードを充実させるというのは、使う人というソフトの立場に立って考えることなのです。例えば公園であれば、その公園を地域の人がどう活用するかによって整備の方法は違ってきます。

東区とひと口に言っても、高齢化が極端に進んでいるところ、子育て世代の多いところ、都心に近いところ、遠いところとずいぶん地域差があるわけですが、いろいろな立場の人たちの要望を受け、ささやかでもそれを実現できた時が一番うれしいです。

高齢者福祉施設がご近所にあり、その忘年会に招かれました。若い人の多い職場です。毎年来ているため知っている顔ばかりです。近年、一つの職場に定着しづらいという若者の傾向について聞いていましたので、これには驚きました。**介護関係は決して楽な仕事ではないはずですが、みんな仕事を続けていて、しかも実に生き生きと楽しそうにしています。人は自分の存在を必要とされることで、こんなに充実感を覚え、輝いていられるのだということに感動しました。**そして、**介護施設が地域にあって、入居する本人も家族も安心していられるということによって、大きなプラスが生まれる**気がします。

若いお母さんたちともよく話をします。最近、「**児童会館の建設を求める会**」のお母さんたちと懇談しました。**東苗穂、東雁来は、私が平成9年から議会で質問し、ライフワークでもあった「東雁来第2土地区画整理事業」によって、急激に人口が増加した地域**です。近年、この地域には子育て世代が流入し、若々しい活気あふれるまちになりましたが、**小学校の児童数が急増したため学校を増築しなければならないという市内でも珍しいエリア**です。すし詰めの教室も大変ですが、**問題なのは放課後**です。**既存の児童会館にも民間児童クラブにも子どもたちが入りきらないのです。就学児童の増加を認識して学校増築までした市は、同時に児童たちの放課後の問題についても策を講じるべき**でした。

また、「**子どもたちが冬期に利用できる室内の遊び場がほしい**」という要望が、他の地域のお母さんたちからありました。冬場は狭いところに引きこもりがちな札幌の子どもたちが思う存分身体を動かして遊べるように、**地区体育館などの既存施設を、幼稚園、小学校の冬休みや放課後に無料で開放してもらえないか**というものです。この問題についても、さきの**放課後児童問題と併せて、市の早急な対応を求めている**ところです。

子育て支援と言えば、待機児童の解消や保育の充実が真っ先に言われるところですが、仕事を持たずに子どもと向き合っている母親たちや、地域に遊び場のない子どもたちの問題も見逃すわけにはいきません。

東区の元気を支えるものとして重要なのは、やはり**生活道路**です。まちを身体に例えるならば、**道路は血管、生活道路は毛細血管です**。小さな血管のつまりが大きな疾患につながるように、**生活道路の整備や安全確保を怠れば市民生活はたちまち支障をきたし、場合によっては生命の危機にさらされます**。「生活道路のすずき」と言われるほどに、この4年間は、皆さんの要望にアンテナを張って、生活道路整備に心をくだいてきました。

地域の皆さんのそれぞれの目線に寄り添って、行政の気づかないようなさまざまな問題を見逃さず、また効率化、費用対効果を考える行政が、ともすれば棚上げにしてしまいがちな問題にも粘り強くアタックし、**隅々まで温かい心の通う安全・安心なまちづくりのために、初心を忘れずに頑張ります。**

北丘珠団地の「買い物難民」状態解消

平成24年8月、北丘珠団地唯一の「寿スーパー」が突然閉店し、住民が買い物難民の状態に陥りました。

ますます**住民の高齢化が進行**し、このような問題は北丘珠団地のみならずどこでも起こりえると考えたすずき市議は市に提案します。

「これからは歩いて暮らせるコンパクト**シティーの時代**。福祉的意味合いも含め各市部局が横断的に取り組み、北丘珠団地町内会のほかNPOや他地域の商店街の代表にも参加していただき、解決に向けた検討委員会を設け、札幌市が財政的に支援する新たな制度が必要」というのがその内容でした。

銀行からの勧めや国の制度に乗って㈱東和システムの江場社長が開店に意欲を示され、吉川貴盛代議士、北海道経済産業局産業部流通課長兼振興室長、そして北海道信用保証協会の尽力もあって、26年3月22日、待望のスーパー「ウィズマート北丘珠店」が開店。その日は、オープン前から行列ができ、顔見知りの住民の方から「ありがとう」と声をかけられ感激したすずき市議でした。

コンパクトトイレ提案 モデル第1号元町そよかぜ公園に

毎年夏と冬に、周辺町内会や学校に声かけして大きなイベントが開催される**元町そよかぜ公園**(北19東21)。しかし、トイレがなく不便だったため、すずき市議は町内会から**トイレ設置の強い要望**を受けていました。

すずき市議の要望に対し、当初札幌市は財政難を理由に難色を示しました。これに対しすずき市議は、これまでの公園面積だけを基準とした設置条件を、そのトイレがコミュニティーにどれだけ活用されるかという点にまで拡大し、地域住民の協力も得ながら、工事費や維持管理費が従来よりもかからない「コンパクトトイレ」を提案しました。この粘り強い要望の結果、昨年7月中に工事を進め、夏祭りまでに完成しました。この「コンパクトトイレ」はバリアフリーを採用し、高齢者や障がいを持つ人にも配慮されており、喜ばれています。

美香保カーリング場

平成24年に公共施設では全国初の通年型カーリング専用リンクが、札幌市豊平区に誕生、世界の頂点を目指す地元のカーリングチームに夢と希望を与えました。実は、それより15年以上も前に誕生している東区美香保体育館のカーリング場は、すずき健雄市議の議会提案によって実現したものです。

古くからカーリングの普及・振興に努めてきたすずき市議は、現在札幌市カーリング協会の顧問でもありますが、自分の事務所近くの公園に水を撒いて手作りのカーリング場を作ったのがその原点でした。カーリング愛好者の強い要望を受け、すずき市議は平成8年3月の札幌市議会予算特別委員会でカーリング場の整備を提案し、翌9年に東区美香保体育館に5レーンのカーリング場が誕生しました。一般のカーリング愛好者の利用のほか、毎年各種大会が開催されており、22年には第6回日本車椅子カーリング選手権大会も開かれています。最近は本州の修学旅行生にも利用され、スポーツツーリズムにも貢献しています。

この3月には、世界女子カーリング選手権が札幌で開催されます。世界のトップクラスの選手が集結するオリンピックレベルの白熱した戦いが繰り広げられることは、五輪誘致に名乗りを上げた札幌の魅力や底力を世界にアピールするまたとないチャンスです。また、同時開催のパラリンピックに向け、まちのバリアフリー化がさらに進展し、札幌が「健康都市」として世界に胸を張れるようになることは間違いありません。

苗穂小学校通学路 電柱移設で歩道除雪

平和26年夏、苗穂町内会から苗穂小学校通学路の電柱移設と、希望公園(北8東14)の樹木伐採について要望がありました。すずき市議が行政に強く要請した結果、冬の到来までに移設と伐採を完了しました。

問題の電柱のために歩道除雪車が通れず、これまでは町内スクールガードの方々が手作業で除雪をしていました。また、公園の樹木は伸び過ぎて道路まで枝がかぶさって倒れそうになっており、危険な状態でした。問題が解決し、町内会の方々の児童・生徒に対する見守りにも、一層力が入っています。

このほか、すずき市議は平成22年には鉄東地区のJR札幌駅に隣接した通称「ななめ通り」の改修工事や歩道障害物の移設撤去も実現しています。

再犯防止のため保護観察サポートセンターの開設と入札加点制度実現

保護司で、市議会更生保護事業を支援する協議会会長であるすずき市議は、近年関連団体から要望のあった保護司会更生保護サポートセンターを平成26年5月、東区役所内に設置しました。

時代とともに、保護司の方々も犯罪を犯した人を自宅に迎えてサポートすることが難しくなってきています。そこで東区役所内にセンタースペースを確保し、保護観察を受ける人たちの相談を受け、支援を行っています。

また、**出所者や保護観察対象者を採用した雇用主に対し、入札時に社会貢献加点する制度**についても、先行する兵庫県庁へ平成25年9月に視察しました。札幌市では、**平成27年4月から実施**します。

こうしたセンターは、手稲区を皮切りに、南区、西区、清田区にも設置されており、全区で設置される見通しです。

介護事業所と地域のかかわりについて講演

国の推計では、現在149万人いるといわれている介護職員。団塊の世代が75歳以上になるといわれる2025年には、さらに100万人に近い人材が確保できなくなるとされ、将来の介護需要に対応できないだけではなく、介護の現場は、現在でさえ人手不足に悩んでいます。人材が集まりにくいのは、介護の仕事には「低賃金で重労働」のイメージが強いことも原因の一つ。すずき市議は、日頃から介護職員の待遇について札幌市独自の取り組みができないか検討を重ねると同時に、国に対して働きかけたいと考えてきました。

地域の高齢者やその介護をしている家族の方々から相談を受けることの多いすずき市議。施設はいろいろあるが、どこを選んだらいいかよくわからないという悩みが多いといいます。**介護施設は地域にしっかりと根をおろし、地域の方々によく認識されたものでなくてはならない**というのが、すずき市議の理念です。平成26年9月26日、**東区民センターで行われた講演会「認知症ケアにおける介護事業所の役割」**で、次のような内容の講演をしました。

「近くに介護施設もあり、そこで働く若い人たちの頑張りを日頃から目にしておりますし、私の妻の父親は在宅介護ですが、ヘルパーさんたちが本当によくしてくれているという実態を見ています」「また、介護する家族の負担を考えた場合、介護施設の役割は重要で、それが地域にあることによって施設に入る本人も不安や寂しさが軽減されますし、家族やご近所の方などがときどき訪問できるというメリットがあります。重要なのは、地域と事業所との普段からの関係です」

「そして、施設で働く人は利用者にとって最も身近な重要な存在となるわけです。介護に携わる人が夢と希望とやりがいを持って働けるような環境を整備することは、政治の重要な役割です」

園児との約束を果たしました ―栄北ミルキイ公園の改良―

平成25年から26年にかけての冬に、**栄北ミルキイ公園**(北47条東7)に隣接した保育園を訪れたすずき健雄市議は、「**公園を何とか改良してほしい**」という切実な要望を受けました。園児たちは、夏になるとこの公園で遊ぶことが多くなるそうですが、雨が降るとすぐ水たまりができ、芝生もはげて凸凹も多く、園児が転んだりして泥だらけになることが多いというのでした。

このため札幌市と相談、暗渠を入れて応急的に砂などを入れましたが、これでは十分ではなかったため、さらに**大がかりな砂入れや芝生張り**を行いました。また、心ない人になぎ倒されていた**花壇ブロックなども建て直し**、園児やお母さんたちとの約束を果たしました。その後、すずき市議は「今年は十分に公園で遊べたでしょうか」といつも園児たちに問いかけています。

公園と言えば、17分区町内会の要望によりあざみ公園(北16東15)において23年に桜の木植樹、25年に遊具を新設しています。また、26年には北40条東公園(北40東2)の一部改良工事も実施しています。

「進路探究オリエンテーリング」事業の実現

未来に夢や目標を持ちにくい、自分の資質を仕事に結びつけることができない、あるいは求職する側とのマッチングがうまくいかないなど、若者たちは将来に多くの不安を抱えています。「人が、生涯の中でさまざまな役割を果たす過程で自らの役割の価値を見出していく」手助けをする「キャリア教育」は、以前から国主導で進められていますが、北海道において問題はさらに深刻です。

市立明園小学校でPTA会長・校区の地域連絡会会長を務め、地域の多くの子どもたちと触れ合ってきたすずき市議も、将来の計画が定まりにくい若者たちの問題に頭を痛めてきました。

専修学校、各種学校の実践的カリキュラムは時代にとともに変化する産業や地域社会のニーズに敏感なものであり、卒業生の就職率もかなり高いと言われています。北海道私立専修学校各種学校議員連盟の会長でもあるすずき市議が市教委に働きかけ、平成25年度から、市教委主催の「進路探究学習オリエンテーリング」が中学生向けに実施され、平成26年度には800人近い生徒が参加しました。